京都精華大学
二〇二五年度入学者選抜　試験問題

座席番号

【小　論　文】（11月17日）

時間　14時30分～16時

【注　意】

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子や筆記用具に触れてはいけません。

二、試験中の使用が認められたもの以外は、すべてカバンに収納すること。使用用具は黒芯の鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り（電動式・大型のもの・ハンドル付きのものは不可、鉛筆使用者のみ）とし、それ以外の使用は認めません。

三、携帯電話、スマートフォン、イヤホン、ウェアラブル端末、電子辞書、ＩＣレコーダーなどの電子機器類は、必ず電源を切ってから、カバンに収納すること。

四、試験開始の合図により、試験を始めること。

五、解答は、すべて「解答用紙」の所定の欄に記入すること。

六、試験終了の合図とともに直ちに筆記用具を置くこと。試験終了後に解答用紙や筆記用具に触れた場合は、不正行為とみなすことがあります。試験監督者が指示するまで、絶対に席を立ってはいけません。

七、問題冊子および解答用紙は、試験終了後にすべて回収するので、持ち帰ってはいけません。

【問題】

次の文章は、神谷美恵子『人間をみつめて』（河出書房新社、二〇一四年）の一部です。出題の都合上、原文に一部変更を加えている一方で、現代では不適切と思われる表記については、執筆当時の表現を尊重して原文のままとしています。

文章を読んで、それに続く設問に答えなさい。

人間は他の生物にくらべて、ずいぶんぜいたくな存在ではなかろうか。人間が元気よく生きて行くためには生物学的条件がそろっただけではだめで、その上、いろいろな精神的、社会的条件がみたされなくてはならない。その中でも、もっとも重要なのが、生きがいを感じたい、という欲求の充足であると思う。

生きがいを感じる心を分析してみると、そこにはいろいろな要素がふくまれていることがわかる。それをみな集めて煮つめてみたら、使命感という形をとるのではないか、と私は以前に書いたことがある。その後、さらに考えていくと、多少の留保を加える必要は感じるが、大すじからいえば、この考えに変りはない。

どうしてこう考えるようになったかというと、その主な理由の二つは、長島愛生園[注1]の患者さんたちの観察および一般精神科臨床での観察に根ざしている。

愛生園の患者さんたちは、気の毒な病気にかかったとはいえ、よい薬の発見により、大部分の人がよくなっており、この病気そのものの苦痛に悩む人の割合はずっと少なくなっている。その上国家の手で一応衣食住と医療とを保障されているから、ただ生きるだけのことならば、一応心配のない状況にある。彼らの中には生きがいが感じられないで悩む人がかなりあるが、そういう人でも、能力のゆるす範囲内で、しごとや趣味など、「何かすること」に打ちこみ出すと、きれいに治ることが多い。園内には、安いとはいえ賃金をもらってする諸作業のしくみもあるが、それとはべつに、何も報酬ももらわずに自分からしごとを買ってでる人もある。たとえば長い間、精薄者の親代りになって愛護の労をつづける人。海岸ぞいの道を一年じゅう毎朝清掃する人。雨の日も風の日にも、丘の上の「恵みの鐘」を朝夕きっかり六時についてきた人。こういう人たちは十年一日のごとく黙々と自分で自分に課した役割を果している。それが皆をよろこばしていることはいうまでもないが、何しろ毎日のことであるから、もうみんなあたりまえみたいな気になって、一々ねぎらいのことばを言いに行くわけでもないし、本人たちもべつにみとめられることを目的にしているのではないから、まったくあたりまえな様子でやっている。

こういう人たちの目立たない尊い存在をながめていると、そこには無言の使命感のような

ものが働いているのではないかと思われてならない。ともかくこういう人たちはノイローゼには決してならないので、精神科の診察室でお目にかかることはない。

精神科の臨床でよく出会うのは、ノイローゼやうつ病の患者さんの生きがい喪失の訴えである。

「私は何のために生きているのかわかりません」

「もう生きるに値しない人間です」

「生きていても意味がありません」

このような苦悩が深くなると、ほとんど必ず自殺を思い、決行してしまうこともある。ある日ある時、内科病棟にいた若い人から「往診」をたのまれて行ったとき、こういう悩みを訴えられて、数時間話しあった。ところが私が島を去った翌日、彼は海へ身を投げてしまった。もう何年も前になるが、この青年のことをいつも心の痛みをもって思い出す。彼はある高い使命感のため勉強のプログラムに参加していたのだが、病のためにそのグループから脱落しなければならなかった。その挫折感から絶望していたのだが、彼を支えうるのはどんなことば、どんな力であったろうか。

精神病者の心には、じつにしばしば使命感があらわれるが、このことにはいつも考えさせられる。たとえば、ある青年は故郷で農業にいそしんでいたが、以前一度かかって治っていたらい(注2)が再発した。今度はもう治らない、と絶望におちいり、自殺を決意し、さいごのわかれの思いをこめて眠る妻子の顔を眺めていた。そのときふと声がきこえてきて、お前には日本を救う大きな使命がある、と言われた。その使命のためにすべての苦しみに耐え、私がお前に告げる教えを人びとに伝えよ、とその声は言った。それ以来、この人はひそかに愛生園にはいり、そこで死ぬまでの数年間、「変ってはいるが人格者」とみんなにみとめられるほど、奉仕的、献身的な生活を送った。毎晩、きまった時間に声がきこえてきて、それをそのまま筆記すると和歌のかたちになり、その内容は愛や平和を説く宗教的な教えであった。私は死の数日前に彼に会ったが、彼は近い死を自覚しながらも、苦しい息の中から、おごそかな調子で自らの使命を語ってやまなかった。

このような使命感は、精神分裂病者には少しもめずらしいものではない。右の症例は分裂病のかたちをした「心因反応」だったかも知れないが、ある大学生は典型的な分裂病で、あるときやはりはっきりした使命感を口にしだした。彼が確信するところによると一九七五年に世界が滅亡するから、その予言をして人類を救うために、自らの生命をささげる使命があるという。

精神病者の心の世界は、ふつうの人のそれとひどくちがってみえるが、この二つの間に断絶はないのだ、という考えかたが、ちかごろの精神医学では優勢になってきている。病者の心の世界は、ふつうの人の心の世界を、ただつきつめたかたちであらわしているのにすぎないのだから、ふつうの人の心のことも病者の心をよく研究することによっていっそうはっきりしてくるのだ。また、ふつうの人の心で、病者の心をかなりの程度まで理解できるはずだ、というのである。

それでは右の二例をどのように考えたらよいのであろうか。愛生園の人の場合は、らいが再発して、このまま自宅におれば、自分はただ家族の負担と恥になるばかりだ、と考えたのであろう。自分は存在する価値はない、と自殺を思い立ったとき、彼の心が無意識のなかから新しい使命感をあみ出したのであったといえよう。真理の伝達者としての使命。他人への奉仕者としての使命。これによって彼はらい再発による苦悩をのりこえ、再び確固とした目的意識の上に立直ったのであった。

大学生の場合は病のために学力低下がおこり、勉強が思うようにできなくなった。それとともに生きている目標がわからなくなり、周囲の者の期待にも添うことができなくなった。いろいろな迷いの中から、やはり無意識的に、ある使命感が生れてこれにすがりついた、とみることができる。

このように、人間がいわゆる極限状況におちいって、生きがいをうしない、もはや生きて行けないと感じるとき、新しい使命感があらわれてきて、その状況をのりこえさせてくれることは、ふつうの人の場合でも、決して少なくない。

以上を思いあわせると、人間が生きて行く力の支えとなる「生きがい感」には、平生から使命感の萌芽のようなものがひそんでいるのではないか、ということが考えられてくる。ただ平生はそれがとくに意識されていないが、生きがいが奪われたとき、はじめて自分は何のため、だれのために生きているのか、自分が生きているのは、ただ生きているだけにすぎないのではないか、ただ有害無益なことではないか、というような疑問が意識にのぼってくる。この問いに、もっとも積極的、肯定的な答えを与えうるのが使命感であることを思えば、極限状況にある人びとの心に、使命感があらわれてくるのは、ごく自然ないわゆる自己防衛機制の一つともいえよう。

使命感のもつ構造も、精神障害者の使命感を観察すると、はっきり浮びあがってくる。精神病者はたいていの場合、何か超自然的な、自己を超えた存在から使命をさずかったという。こ

の存在は、神、仏、天、霊、大自然などさまざまの名でよばれる。ときにはこれを表現するのに、奇妙な新語が発明されることもある。いずれにしてもそこには、使命をさずける者とさずけられる自分、および使命の具体的内容という三つの要素がある。

ふつうの人間の場合は、使命をさずける者が必ずしも超自然的存在とはかぎらない。他の個人や、他人の集団によることもあるし、自らえらんで自分にある役割を課すこともあるのは、前の例でもみたとおりである。

使命の内容は、精神病者の場合、ふしぎに宗教的伝道とか、病気の治療とか、社会福祉的なものが多い。何かに役立ちたい、だれかに役立ちたい、という気持が、人間の心にはよほど根づよくあることの現れではなかろうか。精神病者の使命感の内容には、時として反社会的なものや好戦的なものもみられる。とはいえ、このような時にさえ、たいていの場合、「正義のため」とか「国家の利益のため」などという大義名分による合理化を伴うことが少なくない。人間はよほど「何かのため」に存在したいものであるらしい。

反社会的な内容をもつ使命感の場合、それを実行すれば当然社会に害毒をもたらす。病人でなくとも、歴史上使命に生きた人びとの中で、その行動が人類社会にわざわいを及ぼした人は決して少なくない。

いうまでもなく、使命感と善悪の関係は必ずしも単純でない。たとえ善意にもとづいていても、使命感の結果が他人に迷惑をかけたり、他人を不幸にしたりさえすることは、しばしば目撃されるところである。やっかいなことに、使命感の持主というものは、たいてい自己の使命を善と確信してやまないのだ。

それは使命感がいわゆる「過価観念」になりやすいためであろう。そのため、うっかりすると精神的な視野が狭くなり、ほかのことや、ほかのもののみかたなど、いっさい考えられなくなるおそれがある。それはまた、執着心にも通じる。宗教的伝道者などに、時どきこういう人物がある。

つまり客観性を失いやすくさせるのが、使命感の特徴であろう。自分の存在意義を確信し、使命感にあふれるということは、思いあがりとひとりよがりの危険を伴う。このことは精神病者をみていていつも考えさせられる。

けっきょく、使命感に生きる人の注意すべきことは、つねに謙虚な反省を忘れないこと。自分と自分の使命感とをいつも少し遠くへつきはなして見るゆとりとユーモアのセンスをもつこと。およびたえずあらたに道を求める祈りの姿勢であろう。

注１　長島愛生園 ……　一九三〇年（昭和五年）に日本初の国立ハンセン病療養所として発足した。一九四六年（昭和二一年）に現在の「国立療養所長島愛生園」へ名称変更し、現在に至っている。

注２　らい ……　らい菌によって引き起こされる病気のため「らい病」と呼ばれていたが、この言葉は差別的に使われることが多かったため、らい菌の発見者にちなみ、その後「ハンセン病」と名付けられた。

［設問１］

著者は傍線部「生きがいを感じる心を分析してみると、（中略）使命感という形をとるのではないか」という。著者が考える使命感とはどのようなものか、著者がこのように考えるに至った理由を含めて、四〇〇字以内で説明しなさい。

［設問２］

「生きがい」に対するあなたの考えを、実際に「生きがい」を感じる（感じた）ことの具体例を用いて、四〇〇字以内で述べなさい。